

江戸幕府の医療制度に関する史料（八）

— 鍼科医員佐田・増田・山崎家『官医家譜』など —

香 取 俊 光

今回も引き続き東京大学史料編纂所所蔵の『官医家譜』（請求番号二〇六五—六）を中心に鍼科医員の佐田本家・分家・増田家・山崎家の四系譜を紹介する。

翻刻に際して、常用漢字に直したが、次に掲げた変体仮名はそのままだした。

江へ、而して、者一は、茂一も、与一と、与一より

また、史料中に尊敬の意味をもったマス明け（闕字）、文章の途中から文頭に改行する平出や他の行頭より飛び出る擡頭はマス明けしてその行間に（ ）して注を付した。

文中の（ ）は筆者が『新訂 寛政重修諸家譜』（全二十二冊、統群書類従完成会。以後『諸家譜』と略す）・『徳川諸家系譜』第一（統群書類従完成会、一九八二年）等で補足したものである。なお、系譜以外の事跡は拙稿「江戸幕府における鍼科と盲人の鍼科登用に関する研究」（長尾榮一教授退官記念論文集『鍼灸按摩史論考』、一〇一—一四六頁、桜雲会、一九九四年）を参照されたい。

最初に紹介する「佐田家系譜」は、『官医家譜』十四に分家・本家の順で所収されている。本稿もこれに従って分家より紹介する。家系を知るには本家より見られたい。

本系譜を『諸家譜』第二十（三九〇頁）と比較すると、経歴はやや詳しく、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事はない。佐田分家は、初代定之が尾張光友の侍医から幕府の鍼医という経緯で登用され、子孫は明治まで鍼科医員を勤めた。

源姓

常憲院殿（徳川綱吉）御代
佐田

家紋 菊桐（鞠挟）
枝菊 重菊

高二百俵

（新助 玉縁 佐田玉川定重が長男）

（某）

（針術をもって尾張大納言光友卿に仕ふ）

伊勢国司従二位大納言教具男丹後守定具四代之孫

実拓植次郎左衛門政直次男（養子、母佐田氏女）

（四郎左衛門 法眼） 玉縁 養心軒

定之

始尾張大納言（光友）殿ニ仕延宝七年十一月十一日 殿有
院殿（徳川家綱）江初見同十二日ニ針治を進む御直ニ後扇子時

服拜領同廿八日月並之御礼申上(元禄五年十一月十三日めされて針医となり)元禄六年正月廿六日被 召出奥御医師式百俵同年十二月十一日)加秩百俵同七年十二月十四日(九日)法眼同十年四月三日死六十二才(法名玄徳)池之端(下谷)正慶寺二葬(妻某氏女)

勢州(伊勢国)郷土

実拓植八郎兵衛政次二男(母某氏女)

(始照房)房照 玉養 玉淵 轍翁

道故

(元禄八年七月二十四日はじめて徳川綱吉にまみえたてまつる)元禄十年七月十一日家督小普請同十三年二月廿八日奥医師(宝永六年綱吉薨御により寄合)宝永七年二月廿九日二丸三丸御用(正徳元年三月晦日二丸三丸広敷療治)正徳五年六月廿五日奥医師同六年四月三日寄合二丸三丸吹上御用(享保元年家綱薨御により五月十六日寄合、九月二十六日より徳川家継母勝田氏月光院殿御方広敷に候し、十一月二十六日ゆるさる)延享元年十一月廿日致仕宝暦六年閏十一月二日死八拾七(九十二)才(法名晦処)同寺二葬(妻小尾彦太夫某女)

(某)

(正方)

(政房)

(玉寿) 玉淵(淵、母彦太夫某女)

通久

(元文五年十二月十一日はじめて徳川吉宗にまみえたてまつる。時に十三才)延享元年十一月廿日家督小普請安永三年八月七日致仕同八年五月十四日死五十三歳(法名常休)同寺二葬(妻竹岡玄超辰紀女、後妻金森大膳可郡女)

道祐 玉連(母辰紀女)

安永三年八月七日(十日)家督小普請天明四年十一月二日死三十四才(法名宗達)同寺二葬(妻某氏女)

道真

玉春(母某氏女)

道弘

天明四年十二月廿四(六)日家督小普請(時に十六才、妻美濃部八十次郎茂樹女)

道貞

(女子)

次に『医家藩翰譜』二（国立公文書館所蔵、請求番号一五五一）に所載の「佐田玉春道弘家（分家）系譜」を紹介する。一代玉縁より六代道弘までの名が見え、『官医家譜』や『諸家譜』と比べると系図はなく、内容も簡単であるが参考に紹介する。

高三百俵

佐田玉春 道弘

佐田玉川定重か長男玉縁といふ母八家女にして父の業を継ぐ寛文十一年辛亥尾州（尾張）光友卿にめし出され御鍼医となりしか同十二年壬子六月廿六日死去生年三十三歳下谷池の端正慶寺に葬り法名南室玄涼菴主といふ然るに子なく弟（定之）をして養子とし佐田玉縁と号して尾州家に仕ふ延宝七年己未十一月十一日（タイトウ） 蔵有公（徳川家綱）にめし出され初て 謁見し年俸二百俵を下され御医師となる元禄六年癸酉三月十五日御加増百俵合せて三百俵を給ふて法眼に叙せらる同十年丁丑四月三日に死去正慶寺に葬りて法名養心院法眼積叟玄徳と号しける其子佐田玉養（道故）ハ元禄八年乙亥の秋七月十五日初（タイトウ） て 憲廟（常憲院徳川綱吉）に 謁見し奉り同十年丁丑の七月十日に父法眼玉縁か遺跡を継ぎ年俸三百俵を相続し玉淵とあらため奥御鍼医に 命せられしか正徳二年乙申の五月十六日寄合御医師に 命せられその後老を告て延享元年甲子の冬十一月廿日に隱居して家督を玉寿（通久）に譲り宝暦六年丙子の冬閏十二月二日に死去正慶寺に葬り法名を白茅院轍翁快処といふ其子佐田玉寿（道祐）延享元年甲子の冬十一月廿日家

督を継ぎ三百俵を承統し小普請組となりこの玉春（道弘）にいたる

次に紹介する本家の「佐田家系譜」は、『官医家譜』十四に所收され、『諸家譜』第二十二（三八〇九頁）と比べると、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事が少ないが、初代直昌―二代直茂―三代定重の系譜や、定重の医員の登用の様子が詳しい。

佐田本家は、初代直昌・二代直茂は武士であったが、三代定重は町医師から身を起こし幕府の鍼科医員に登用され、子孫も明治まで鍼科医員を勤めた。

源姓

東照宮（徳川家康）御代

佐田

家紋 菊桐

片輪車

高三百俵

具平親王十八代（一ノノイワリガヒ）「同氏新右衛門家譜」正三位大納言村親三男左中将具忠とあり」北畠左中将政郷次男田丸中将具忠之男

四位小將

田丸中務大輔

直昌

天正十年六月二日本能寺ニ而信長生害之時 東照宮(徳川家康)和泉之堺ニ伊賀路御帰国之時御使を賜之御麾下ニ可奉属旨仰を蒙依之直昌命ニ従ひしかは御書を賜る褒し給ふ同十八年秀吉公小田原を被攻付蒲生氏郷ニ属して攻衆ニ加り同年奥州(陸奥国) ニ一揆起し時氏郷共ニ是を討氏郷卒せし後豊臣之姓を賜「慶長元年十二月十三日之旨」ニ従五位侍ニ任し信州(信濃国)川中島科り後淡州岩村之城ニ住して土岐之城を兼守慶長五年(石田) 三成反逆之時三成ニ応せしか三成亡之後伊賀路ニ御忠節せしを被思召助命を蒙り勢州海熊ニ而之謁後堀秀政被預越後ニ閉居す剃髪して林鐘と号す慶長十四年上総介忠輝君直昌か罪を乞賜ニ依而被免三月五日忠輝君之召有しに同月七日頓死す其事をはたさす六十七才葬地不知「越後之国高田ニ兼而建立し大岩寺ニ同氏新右衛門家譜」

田丸兵庫

直茂

松平(前田) 肥後守利常家人ニ与成

五左衛門 兵左衛門 玉川

定重(定しむ)

明暦元年ニ江戸ニ質居し医を業とす針術を能す万治二年(テウジ) 殿有院殿(徳川家綱)御不例之時玉川か針術ニ妙なるを

土屋但馬守数直推挙申すニより家柄之由を茂聞す被令登城十月三日拜謁を賜同四日針術を進む追々御快復有ければ十一月七日三百俵之禄を賜御三予之間宿直乞四十七日(同四年二月二日徳川家綱御筆以一張弓勢定天下以三尺劒光安国土の二句および鶉の御画二幅をたまう)寛文五年十二月廿八日法眼位に叙し御側医(奥医)と成延宝六年四月廿八日死六十才(法名宗川)下谷広徳寺ニ葬(妻牧野備前守家臣豊田清左衛門某女)

台徳院殿(徳川秀忠) 御筆掛物一幅

殿有院殿(徳川家綱) 御筆掛物鶉之画御二幅対

同御書掛物一幅(以一張弓勢定天下以三尺劒光安国土の二句) 右拝領

(某) 佐田分家)

(女子)

伊勢松 (左兵衛 母清左衛門某女)

玉川

道毘(みちび)

始定達

延宝六年七月十二日家督(表針医、時に十五才)同年八月六日剃髪(元禄三年九月十九日さきに家業出精すべきむね仰下さるるところ、療治の数少なきことその志し等閑なりとて、小普請に貶さる。しかりといえどもその後治術よろしき聞えありあらば恩免あるべきとの台命を蒙る。同七年十一月二十一日表針

医に復す)元禄十一年十一月十八日(十三日) (ケツジ) 常憲院殿

(徳川綱吉 御近侍医(奥医) 同十二年十二月十八日法眼ニ叙

(宝永六年徳川綱吉薨御により二月二十一日寄合) 宝永七年十

月十三日死四十七才(法名紹玄) 同寺ニ葬(妻丹羽長門守家臣

丹羽半兵衛茂嘉女)常憲院殿(徳川綱吉)御筆掛物一幅拜領(竹

雪)

(某)

養逸 (母茂嘉女)

親政 (ちかまさ)

(宝永四年六月十三日徳川綱吉に初見、時に十六才) 宝永七年

十二月廿六日家督寄合正徳二年正月廿九日病免小普請入享

保九年六月十四日死(三十三才、法名紹了) 同寺ニ葬

(女子)

実者佐田玉淵(道故) 三男

玉川 十之進 (母彦太夫某女)

政房 (まさふさ)

享保九年八(九)月三日急養子家督(時に十六才) 同十年三

月廿八日 (ツツジ) 惇信院殿(徳川家重、有徳院徳川吉宗の誤りか)

江初見宝暦六年十二月廿七日奥医師(同十一年惇信院殿徳川

家重)薨御以後(八月四日)寄合安永五月四日(浚明院殿徳川

家治)日光御社参供奉天明二年十一月六日死七十(四)才(法

名宗了) 同寺ニ葬(妻親政女、後妻土岐重元端山女)

(女子)

玉菴 左太郎(母親政女)

道直 (みちなお)

(宝暦九年三月十四日惇信院殿徳川家重に初見) 天明二年十二

月廿四日家督小普請寛政七年十一月廿九日致仕(時に五十

四才、妻堀本一甫頭承女)

(政直) (まさなお)

玉伝 熊吉(母頭承女)

有道 (ありみち)

寛政七年十一月廿九日家督小普請(時に二十二才)

(女子)

道政 (みちまさ)

(某)

田丸新右衛門家譜を按るニ直茂子ニ頭和と云ふ其養子を

兵右衛門某と云ふ者実者同氏市右衛門直宗か弟也後父子

不和ニ付一子頭和を殘し退去とあり其頃迄者加州(加賀国)

ニ有る様ニ見ゆ此兵右衛門某なる者即玉川定重と見へた

り併佐田氏譜と世系相違せり仍而録す

次に『医家藩翰譜』二(国立公文書館所蔵、請求番号一五五一)に所載の「佐田玉伝有道家」を紹介する。『官医家譜』や『諸家譜』に比べて直昌―直茂―定重の記載が細かく、特に定重が幕府に登用されるまでの下りは大変興味深い。ただ、系図ではないので多少見づらい。

高三百俵

佐田玉伝 有道

佐田家ハ村上源氏にして本国勢州(伊勢国)新里国司の北畠家の支流本名田丸を称す中將具忠伊勢の国田丸の城主たりしか隠居して如鷹と号す其子田丸中務大輔直昌ハ天正十壬午年六月ヲイト東照宮(徳川家康)伊賀路御越の時御使を以て麾下にすへき旨仰下され直昌忠節を尽し奉る北畠其後相州(相模国)小田原の役にハ蒲生右京大夫氏郷に列し奥州(陸奥国)入国のせつより同国三春田村を直昌に与ふ特に從五位下侍從に叙任せらる後信州(信濃国)川中島に転しまた美濃岩村の城に移りけりかつ土岐の城を兼守り慶長五年庚子九月関ヶ原の乱にハ石田治部少輔に列せり石田か党敗北して既に静謐となるに此時田丸ハ罪科ありといへとも去ル天正十年伊賀路御越の時の忠義を思しめし出され助命して勢州(伊勢国)朝熊に滴せらる其後剃髪して名を林鐘とあらたむ慶長十五年庚戌上総介忠輝卿の家臣山田隼人をつけ為いけれハヲイト東照宮(徳川家康)これを許けれハ同年三月五日山田隼人をして忠輝君に直昌をめしけれ共同七日頓死春秋六十七歳なり長子田丸兵庫頭直茂ハ加州(加賀・前田)利常に招れ加州(加賀国)ニ至り正保四

年丁亥十月六日直茂七十二歳にして死去せり法名事山院恵叟良知といふ直茂に男女の子五人あり長男田丸兵部正長といふ次ハ女子にて安見伊織に嫁し其次ハ女子ハ今枝佐左衛門に嫁し其次ハ定重とて兄正長に離れ母と共に佐田郷右衛門定次か家ニいたる其次ハ田丸織部正長といふて兄兵部正長か嗣となれり直茂三男定重ハ勢州(伊勢国)齋宮に生れ父直茂越後の国に赴くのせつ母定重を連れ同族たる佐田郷右衛門定次に再嫁しけれハ是より定重佐田五左衛門といふ明暦元年乙未の六月廿八日江戸に出府し兵左衛門と改めけり若年より持病にくるしミミづから針を採て療治せしかいつとはなく手に針術の妙を得たり同年(明暦元年)丁丑の秋九月八日土屋民部少輔利直かすゝめに従ひ剃髪しける時に土屋利直佐田玉川と名を附られて此後針術を以ておほく病者を濟ふ万治三年庚子の秋九月九日よりヲイト敵有公(徳川家綱)御不例これに依て土屋但馬守數直玉川か針術の妙たるを 台聴に達しけれハ同冬十月三日玉川を営中にめしたり玉川初て登營し巳の上刻大奥御休息間ニ於て 拜謁し奉り翌四日より鍼術をそして療功をはげミケる程に日々御快然有せられけり故に御機嫌斜ならず同年三月七日年俸三百俵を下され御鍼医たるへき旨を酒井雅楽頭忠清伝へられたり同十二月五日宅地を下され御側医師に命せらる柳營血猿を四十七日同廿一日小退出すへき旨を久世大和守広之土屋但馬守數直伝へられけり寛文五年己巳十二月廿八日法眼に叙せらるしかる所ニ延宝六年戊午の春所労同夏にいたり大術にて四月廿八日六十才にて死去せり下谷池端法林

山正慶寺に葬り法名を玉峰宗川と号す其子佐田玉川定達(道毘)ハ寛文四年甲辰の夏閏五月廿四日に生れ童名を田丸伊勢松後に左兵衛改む延宝六年戊午の秋七月十二日父玉川か跡式を下さる旨久世大和守広之伝へられ俸米三百俵を承統し同年八月六日剃髪して玉川と改めけるハ元禄三年庚午九月十九日家業無精のよしにて小普請組にいる同十一年戊寅十一月十八日めし出され御側医師となり同十二年己卯の冬十二月十八日法眼に叙せらる柳沢出羽守保明これを云ふ然るに宝永六年己丑の正月 薨御に依て同年二月廿一日一同御免寄合医師となり同七年庚寅に死去すと其子佐田養逸(親政)同年十二月廿六日父玉川遺跡三百俵を承統し小普請組となる是より相統して玉伝有道にいたるとかや

次に紹介する「増田家系譜」は、『官医家譜』十二に所收され、『新訂寛政重修諸家譜』第二十一(二二〇〜二二一頁)と比較すると、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記載はないが、附属した方々の名前は詳しい。また若干年月日に相違が見られる。

増田家は、『官医家譜』に和泉国(大阪府)忍海郡林堂村に住む家系であるというので、初代良貞の登用の経緯は不詳だが、推測するに町医師からの登用ではなかったであろうか。子孫は、鍼科医員として明治まで勤めた。

藤原姓

増田 平氏 安川

丸之内抱茗荷
家紋 上り藤一文字

一六葉菊

高六百石

安川修理大夫某後胤和州(和泉国)忍海郡林堂村住人安川弥次郎某男九右衛門良感男

初 安川瀬平

良貞

元禄九(八)年十二月(十一日)針治を善するにより) 被召出式百俵被下(同二十八日徳川綱吉に初見、のち) 桂昌院殿

(玉、本庄氏、三代將軍徳川家光側室、徳川綱吉生母)附(同九年十月二十五日廩米二百俵下賜 宝永元年十二月二日致仕同七年七月十五日死八十歳(法名浄貞) 深川光嚴寺江葬

寿鍼 法眼

初 安川瀬平 (母某氏)

良富

元禄十一(二)年三月十五日(徳川綱吉に) 初見宝永元年十二月二日家督寄合同二年八月十九日西丸奥医師 随性院殿(八重姫、鷹司左大臣兼熙女、徳川綱吉養女、水戸吉孚室) 光現院殿(松姫、尾張綱誠女、徳川綱吉養女、前田吉徳室) 御伺同三年九月十五日(同四年七月十八日) 加秩式百俵同年十二月十八日法眼(のち本城に候す) 同七年七月朔日加秩式百俵采地ニ替賜り実録六百石ニ成(相模国愛甲・高座郡の内) 文昭院殿(徳川家宣) 御筆拜領正徳二年

〔一〕「月日不知」奥御鍼醫師同六年(徳川家継薨御により)五月十一(一六)日寄合(ツツシ) 天英院殿(照姫、近衛基熙女、徳川家宣側室)(タイトウ) 月光院殿(お喜世の方、勝田著邑女、徳川家宣側室、家重・家継生母)御同享保四年五月六日死(法名宗貞)同寺ニ葬(妻板倉備中守家臣服部権兵衛某女)

(兼純)

(寿春) 寿得 (母権兵衛某女)

雄伝(ゆうでん)

宝永三年十月朔日(徳川綱吉に)初見(時に十四才)享保四年七月廿七日家督寄合享保十三年四月日光御社参供奉同十四年六月十六日御座敷女中病用「年月日不知」(タイトウ) 瑞春院殿(お伝の方、黒鍛小屋権兵衛正元女、徳川綱吉側室)御用西丸女中病用并(タイトウ) 寿光院殿(大典侍局、清閑寺熙房女、徳川綱吉側室)御伺二丸女中病用「年月日不知」(タイトウ) 小五郎殿(一橋宗尹、徳川吉宗子)御抱瘡御酒湯御祝儀白銀三枚拝領宝曆三年八月四日致仕明和六年十月十八日死七十七歳(法名帰信)同寺ニ葬(妻大久保源右衛門忠享女、後妻堤丈右衛門茂英女)

(女子)

(女子)

(某)

(某)

寿慎 平助 藤太郎 (母茂英女)

宝曆二年十二月十二日初見同三年八月四日家督寄合明和九年四月十一日死四十三歳(法名了信)同寺ニ葬

(正章)

(信峯)

(女子)

(女子)

(女子)

(某)

実伴女昌栄童男

寿得 昌仙 常助 (母伴道与栄宣女)

良香(よしか)

明和九年七月五日養子家督小普請安永元年十二月廿一日初見寛政二年二月十二日御座敷女中病用同月十九日寄合同五年「月不知」廿日(ツツシ) 貞恭院殿(種姫、田安宗武女、徳川家治養女、紀伊治宝室)御守殿女中病用同九年四月西丸御座敷女中病用同十一年十月十二日(タイトウ) 淑姫君(徳川家齊女、清湛院殿、一橋斎朝室)御守殿女中病用

(女子)

(女子)

(女子)

(金之助 寿専)

(某)

(父に先だちて死す)

(女子)

最後に紹介する「山崎家系譜」は、『官医家譜』十一に所収され、『新訂寛政重修諸家譜』第二十(二〇〇頁)と比較すると、全体的には経歴が洩れていたり、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事がないが、五代目次善の経歴は細かい。

山崎家は、初代宗円次氏が薬部屋坊主から鍼医に登用されたり、五代目次善が現在東京国立博物館に所蔵されている針灸銅人形の製作に関わったなど医学史上に興味のある家系である。系譜について、伊藤武雄「幕府鍼医山崎氏代々墓所記」(『掃苔』四十一、一九三五年)があるので、これによっても系譜を補足した。

山崎

家紋 (三蓋菱 輪違)

高式百俵

先祖詳ならず

山崎宗円

次氏

常憲院殿(徳川綱吉) 江奉仕御薬部屋(小納戸)坊主元
禄五申年十一月廿二(三)日(かつて鍼治をよくするによって、

班をすすめられて) 御側御針医式百俵(百俵同六年十二月十一日百俵加えられて、都て式百俵となる) 同十一寅年六月廿六日死(法名勝界) 小石川寂円寺ニ葬る

(女子)

(母某氏女)

山崎宗悦

茂種

元禄九子年八月三日(徳川綱吉に) 初見(時に十三才) 同十一年七月十八日家督享保二酉年五月五日死(三十四才、法名得生) 同寺ニ葬る(妻黒田大和守家臣山口源太夫某女)

(清之丞 母源太夫某女)

山崎宗円

次茂

享保二戌年八月十三日(三日) 家督(時に八才) 寛保二戌年七月五日死(三十三才、法名了清) 同寺葬る(妻多紀永寿院元憲女)

実湯川寿三春庵六子

山崎寿円

鉄次郎(宗円)

母木下道円守直女

次美

寛保二戌年十一月(十月) 三日急養子家督(二十三日寄合にすすむ) 宝曆九卯年十二月廿三日(法心院殿(おこんの

方、太田政資姉、徳川家宣側室御葉御用寄合天明二寅年三月廿三(七)日致仕(五十八歳。寛政十二年六月九日死六十八才、妻次茂女)

著述之書

一 針灸金鏡録 三卷

(女子 次美妻)

山崎宗運

造酒之丞

宗徳

安節

(母次美女)

次善

天明三卯年三月廿七日家督(時に二十六才)寛政元酉年三月廿六日 安祥院殿(在京局、三浦義周女、徳川家重側室、

清水重好生母)御伺同年四月三日寄合同月七日奥御医師同年

六月三(十三)日 蓮光院殿(お知保の方、津田信之姉、

徳川家治側室)御附同年十二月精勤ニ付二丸大奥(金五十兩

を給る寛政二戌年五月一橋大納言殿御所旁御快全ニ付大奥

而銀十五枚同年十二月廿八日 蓮光院殿御療用泊り数

九十余相動候ニ付時服二同三亥年(蓮光院逝去により)四月廿

七日小普請入同年四月廿六日 蓮光院殿御療用骨折ニ

付銀十五枚(十月朔日朔望佳節には登營すべきむね仰せ下さ

る)同四年六月廿日御広敷廻り同月廿四日寄合同年七月

廿八日 孝順院殿(徳川竹千代、家斉子)御附奥御医師

同年十月八日医学館(教授)江折々罷出針術之儀御医師共相

談仕取立遣し候様仰付らる同年十一月十五日孝順院殿御色

直御祝儀ニ付熨斗目時一重を賜る同年十二月十三日

御台所寔子、広大院、近衛経熙養女、島津重豪女、徳川家斉室

御療治同五丑年(孝順院逝去のち)七月十六日御本丸奥御

医師同年十二月廿七日医学館相動ニ付銀十枚同六寅年二月

十七日御産婦御針療仕候ニ付縮緬二巻を給る同年六月廿五

日先達而中より詰切同様精勤ニ付思召を以御紋付縮御帷子

を賜る同七卯年三月五日小金御鹿狩供付同年十一月

御台所御懷胎ニ付妊婦やしなひ哥(歌)百巻を撰奉獻同年十

二月十七日法眼同八辰年(三月二十八日)御産御療治差上候

ニより金巻枚 御台所縮緬三同四月十一日御枕直し

御祝儀之節魚脇牡丹御紋付黒縮緬御召御小袖拝領同九丑年

四月八日 敬之助君(徳川家斉男、尾張敬之助)御病中骨

折ニ付銀十枚同年十二月七日 御台所より金七枚同十

二月廿九日 御台所御全快ニ付御本丸白銀廿枚

大納言殿同十枚同十年三月朔日同斷御用裏金巻

枚 御台所より銀十五枚八丈島巻反同年四月十八日

豊三郎君(家斉男)御全快銀三枚同年十二月朔日沈氏

積骨一卷献上同十二月十五日 御台所御全快銀十枚同

月 大納言殿御針療銀十枚同十一月未年十二月廿三日同斷

銀十五枚を賜ふ(天保五年十二月四日死七十五才、妻勝次郎右

衛門正扶養女)

高式百儀

実多紀永寿院(元惠) 四男

山崎宗徳

「某 (元方) もとがた

寛政十年年六月十三日初見 (十七歳、同十二年医学館鍼学講義、文化十年奥医、文政二年法眼、天保十二年七月九日死七十一才、妻山本宗英惟直女)

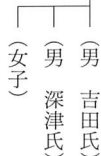
(宗安力)

(琦)

(西城奥医見習、文政七年十一月二十六日大納言殿徳川家慶附奥医、年月不明西城奥医、同十一年十二月十六日法眼、明治七年七月死)

(某)

(女子)



(針之進)

参考文献・注

(1) 佐田本家定重については、小川春興『本朝鍼灸医人伝』(四五頁、半田屋、一九三三年)、その子道毘(四六頁)を紹介している。

佐田家分家三代目玉淵房照(道故)の著述に『鍼灸概要』(写本、『臨床鍼灸古典全書』21、一七五〜二七七頁、オリエント出版社、一九九〇年)がある。

(2) 増田氏については、小川前掲書では良富(五四頁)・良富(五七頁)・雄伝(五八頁)・良条(五八頁)・良香(五九頁)・正定(六三頁)について触れている。

(3) 山崎氏については、小川前掲書では次氏(六七頁)・茂種(六八頁)・次茂(六八頁)・次美(六八頁)・次善(六九頁)について触れている。このほか、伊藤武雄「幕府鍼医山崎氏代々墓所記」(『掃苔』四十一、一九三五年)、小曾戸洋「東博銅人形の製作者および年代について」(幕府医官山崎氏の事跡)、『日本医史学雑誌』五五―三、一九八八年)がある。

ちなみに針灸銅人形・『銅人臉穴針灸図経』については、矢数道明「国立博物館の銅人形について」(『医道の日本』一九七二年四月号)、于阿「宋『新铸銅人臉穴針灸図経』残石的発現」(『考古』一九七二年第六号)、『新注銅人臉穴針灸図経』(續文堂、一九七四年)、『銅人臉穴針灸図経』(『鍼灸医学典籍大系』九、出版科学総合研究所、一九七五年)、『中国伝来 東京国立博物館蔵 鍼灸経穴銅人形(掛図)』(医道の日本社、一九七七年)、丸山敏秋「針灸、古典入門 銅人臉穴針灸図経」(『現代東洋医学』五一―二、

一九八四年、のち『針灸古典入門』、一五九～一七〇頁、思文閣出版、一九八七年に所収）、小曾戸洋「目で見る漢方史料館——針灸銅人形と『銅人腧穴針灸図経』残石——」（『漢方の臨床』三五―九、一九八八年）、同「目で見る漢方史料館 元版・銅人腧穴灸図経」（『漢方の臨床』四一―九、一九九四年）がある。

また、次美つぐみの著述『針灸金鏡録』三巻は、『補訂版 国書総目録』第四巻（岩波書店）で調べると現存していない。

（群馬県立盲学校）